



Title	長崎医学の百年, 第一章 西洋医学伝来, 第二節 出島のオランダ商館医
Author(s)	長崎大学医学部; 中西, 啓
Citation	長崎医学百年史, 1961, pp. 4-21
Issue Date	1961-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/6561
Right	Copyright(c) 1961 by Nagasaki University School of Medicine

This document is downloaded at: 2019-10-15T09:53:09Z

第二節 出島のオランダ商館医

寛永十六年七月五日（一六三九年八月四日）、幕府は、ポルトガル人の入国を禁止、オランダ人、中国人以外は一切の外国人との通商が禁止された。

これより先、寛永十一年（一六三四年）以来築かれていた長崎の出島（始め島と称し、中頃まで築島と呼ばれていた）が完成して、そこにいたポルトガル人等が追放されたままであったので、その跡にオランダ商館が平戸より移転して来た。それは寛永十八年（一六四〇年）のことであった。

以来、オランダ東インド会社の職員中、医官一名が相交替して来朝し、主としてオランダ通詞に医学を伝授し、漸くオランダ医学がわが国に興隆することとなり、南蛮医学を凌駕するに至った。

中でも、カスバル・スハンベルゲン Caspar Scham-bergen ハンス・ヨアン・ステイビン Hans Joan Sti-

bin アルマンス・カツツ Allmans Katz ダニエル・ブッシュ Daniel Busch ウィレム・テン・ライネ Willem ten Rhynge ウィレム・ホフマン Willem Hoffman エンゲルベルト・ケンペル Engerbert Kämpfer カルル・ペーター・チュンベリー Carl Peter Thunberg ヤン・フレデリク・フェイルケ Jan Frederik Feilke フランツ・フォン・シーボルト Philipp Franz Balthasar von Siebold オットー・モーニック Otto Mohrnick ファン・デン・ブルック J. K. van den Broek 等は特に後世に及ぼした影響が大きい。このファン・ギン・ブルックの後任であり、第二次海軍伝習教官でもあったヨハンネス・リディウス・カタリヌス・ポンペ・ファン・メールデルフォルト Johannes Lidius Cathalinus Pompe van Meerdervoort は上記の人々のなし得なかつた洋式医学教育の徹底化を実現したが、又、そのボ

ンペの開いた医学伝習の系譜が今日の長崎大学医学部にまで至っているのである。先ず出島のオランダ商館医たちの残した西洋医学の伝来と発展を示そう。

第一項 カスパル・スハンベルゲンより

ケンペルまで

南蛮医学の系統が禁教によって衰微した後、オランダ人による医学伝来として最も初期に大きな影響を残したのはカスパル流の祖として知られるカスパル・スハンベルゲン Caspar Schambergen である。フランソワーズ・ワレンタイン Francois Valentijn の日本日誌によれば慶安二年十月二十四日（一六四九年九月十九日）にスハンベルゲンは来朝し、出島において同年十月二日（陽曆十一月七日）より若い日本の外科学生四人を教えた。

この年十月二十一日（陽曆十一月二十五日）に至り、新たに渡来したオランダ特派使節アンドリウス・フリジウス Andrius Frisius は、医師スハンベルゲンその他とともに長崎を発し、江戸に参勤したが、スハンベルゲ

ンはフリジウスの帰崎（慶安三年三月七日即ち、一六五〇年四月七日）以後も江戸に留まり、医学を伝習し、そして慶安三年十月十三日（一六五〇年十一月六日）、長崎に帰ったが、これを契機としてオランダ医学が興隆した。そしてスハンベルゲンの名カスパルが流名とされ、後世まで、永い間、影響を及ぼすものとなったのである。その門人としては、猪股伝兵衛、山口三郎左衛門、鳥飼道節等が知られている。

猪股伝兵衛はポルトガル通詞で、寛文四年四月二日、没した人である。

山口三郎左衛門は江戸でスハンベルゲンに医学を学び、ユリアン・スヘーデル Jeuriaen Schedel について砲術を学んだ人で、更に長崎で医学を修業した。

アンス・ヨアン・ステイビン Hans Joan Stibin は承応二年（一六五三年）に長崎に渡来したが、儒医向井元升は翌年、幕命により、西吉兵衛を通訳としてオランダ医学を質し、紅毛流外科秘要を著わした。ステイビンはカスパルと同じく、単にアンス・ヨアンとも呼ばれて

いる。

寛文元年（一六六一年）渡来したアルマンズ・カッツ Allmans Katz (Hermannus Katz) に学んだ嵐山甫安はカッツが寛文二年九月二十三日（一六六二年十一月三日）、「帰国した後も次番のブッシュ Daniel Busch に学んだ。ブッシュは同年九月九日（陽暦十月二十日）渡来し、翌年九月に帰国した。

甫安は平戸藩医となり、蕃国治方類聚を撰したが、その門人のうち、桂川甫筑は後に江戸に出、宝永元年幕医となり、代々甫筑、甫周等を名乗り、父祖の業継いだ。

瀬尾昌宅（昌琢）の諱は淳範である。生所は明らかでないが、正保二年生れである。寛文年間、長崎に來遊して出島蘭館に出入し、外科をアルノルド・ディルクセン Arnold Dirckz に学び、その修業証書を得た。それは寛文七年十二月六日（一六六八年一月十九日）であった。立会証明したのはオランダ通詞名村八左衛門、西吉兵衛、加福吉左衛門、本木庄太夫、富永市郎兵衛、立石太兵衛、榎林新右衛門の他、検使役人渡辺金右衛門正綱、中村久

右衛門安勝、矢中友太夫乗直である。

昌宅は貞享元年四月七日、幕府に召され、奥医となり、その後、病により閉門を命ぜられたが、元禄二年六月四日、小普請となり、十一月七日、再び奥医となり、宝永五年十二月九日、法眼に任ぜられた。そして享保三年六月二十九日に没した。

著書に外科心鏡集（寛文七年、林道榮序）がある。

延宝二年（一六七四年）夏、出島蘭館医として渡来したウィレム・テン・ライネ Willem ten Rhynne は一六四七年オランダのデフェンテル Deventer に生れ、フラネケル Franeker の大学、ライデン Leiden 大学に学んだ。ライデン大学ではフランシスクス・ジルフィウス Franciscus Sylvius ムハンネス・ホルニウス Johannes Hornius フローレンチウス・シル Florentius Schynl 等の指導をうけ、学位を受けた。延宝元年（一六七三年）、オランダ東インド会社に奉職し、同年陽暦六月、本国を出帆し、翌二年始めに、バタビア Batavia に着いた。そして同年七月二十三日（一六七四年六月二十

日)、カピタン、マルチヌス・ケーツァル Martinus Caesar と共にバタビアを出帆し、陽曆七月下旬長崎に着いた。

延宝三年及び四年(一六七五—七六年)の春、江戸へ参礼したが、ウィレム・テン・ライネはわが国の鍼灸術、樟樹、茶を研究した。そして延宝四年秋、帰国した。

その著述 *Dissertatio de Arthritis: Mantissa schematica de acupunctura, & Orationes tres. I. De Chymiae ac Botanicae antiquitate & Dignitate. II. De Physiognomia. III. De Monstris singulari ipsius auctorio notio illustrata* を天和三年(一六八三年)、ロンドンにおいて発表したが、これは東洋固有の鍼灸術をヨーロッパに紹介した学術文献として有名である。

元禄元年(一六八八年)渡来したウィレム・ホフマン Willem Hoffman はオランダ通詞楢林鎮山に外科を伝え、フランスの名医アンブラス・パレ Ambrois Paré (一五一〇—一七〇年)の外科書を与えたので、以後、実証的な西洋医学が広まることとなり、わが国医学界にお

いて楢林流外科が特異な存在となる基を作った。

ウィレム・ホフマンの後任者として、元禄三年十月二十二日(一六九〇年九月二十四日)、渡来したエンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kämpfer は慶安四年八月一日(一六五一年九月十六日)、ドイツのリッペ伯爵領ウェストファリア Westphalia のレムコー Lengo において生れ、ブルンスウィック Brunswick 侯国のアーメリン Aamelin の学校に入り、ルネブルグ Lüneburg ハンブルグ Hamburg リャーベック Lübeck ダンチック Dantzich などを経て、延宝二年(一六七四年)、ポーランドのクラコウ Krakau に行き、そこで学位を得、更に延宝四年(一六七六年)、ロシアのケーニヒスベルグ Königsberg に赴いて自然科学及び医学を修めたのである。その後、一時、家庭教師を勤めていたが、天和元年(一六八一年)、スウェーデンのウプサラ Upsala に赴いて、同地の大学に学び、それよりロシア、ペルシアを経て、オランダ東インド会社に雇われ、ペルシア湾に遊戈中のオランダの艦隊の軍医となっ

た。そしてアラビア、インドを通過して、スマトラに寄り、元禄二年秋（一六八九年九月）バタビアに着いた。数ヶ月ジャワ Java に滞在したケンペルは、元禄三年三月二十九日（一六九〇年五月七日）、出島蘭館医としてオランダ船デ・ウェルストローム de Waelstroom 号に乗ってバタビアを出帆し、十月二十二日（陽曆九月二十四日）、長崎に着いた。翌日上陸したが、再び船にもどり、十月十四日（陽曆九月二十六日）、手荷物を携えて出島に落付いた。

出島でケンペルは二十四才位のオランダ医学を志望する青年を助手としたが、それは出島乙名吉川儀部右衛門の紹介によるものである。

この青年は元禄四、五両年（一六九一—一六九二年）のケンペルの江戸参礼に同行したが、オランダ語をよく読み書き出来るようになり、医学もケンペルの懇切な教により上達した。そしてケンペルはこの青年に相応の年給を与えた。

ケンペルは日本の行政、風俗、政治史、動植物、鉱物、

農工商業等とその青年及びオランダ通詞横山与三右衛門、本木庄太夫、榎林新五兵衛等に質問して研究し、元禄五年九月二十日（一六九二年十月二十九日）、デ・アドミラル・パンブス de Admiraal Pampus 号に乗り、翌々二十二日（陽曆十月三十一日）、長崎を出帆、バタビアを経てオランダのアムステルダム Amsterdam に着いた。

その後、日本在留中の博物学の研究八篇、鍼灸術の研究一篇及びマラバル Malabar の風土病に関する研究一篇、合せて十篇の論文をライデン Leiden 大学に呈出し、医学博士の称号を得た。それは元禄七年（一六九四年）であった。又、リッペ伯待医となり、正徳二年（一七二二年）には、わが国文化の正確な知識を紹介した名著 *Amoenitates Exoticae*（外国奇聞）をレムゴーにおいて出版した。その際日本紀事 *Geschichte und Beschreibung von Japan* を上梓する予定であったが、その機を得ないまま、享保二年九月二十九日（一七二六年十一月二日）、病没した。

日本歴史の英訳本は享保十二、三年（一七二七—二八年）、ロンドンで出版され、ラテン訳本も享保十二年に同地で刊行された。オランダ訳本は享保十四年（一七二九年）と同十七年（一七三二年）にアムステルダムで刊行され、フランス訳本は享保十四年（一七二九年）、ハーグ Hague で上梓された。原文遺稿は遅れて、安永六—八年（一七七七—七九年）、レムゴーで出版された。

その他、*Icones selectae plantarum quas in Japonia collegit et delineavit E. Kaempfer, ex archyp. in Museo Britanico asservatis*（日本植物画集）はその遺作であるが、出版されたのは寛政三年（一七九一年）のことであった。

本木庄太夫良意は諱を栄久と云い、オランダ通詞で、出島蘭館医に接し、医学を修めた。良意は寛永五年に生れ、元禄十年十月十九日に没したが、蘭館医から Johann Remmelin の著述にかかると Pinax Microcosmographicus の第二版を Justus Gratianns が蘭訳した剪型解剖図を一六六七年、アムステルダムの Justus

Danckers が出版したものを貰って、解剖図譜を作った。それは秘伝書として世に行なわれ、明和九年に鈴木宗云によって出版された。本木の就学した蘭館医の中にはケンペルもいたことは明らかである。

檜林鎮山の諱は時敏、通称は初め彦四郎、後、新右衛門、新五兵衛、晩年、栄休と称し、号は鎮山、得生軒と云う。慶安元年十二月十四日に生れ、オランダ大通詞になった。檜林鎮山のダニエル・ブッシュ Daniel Busch アルノルド・デルクセン Arnold Dirckz ウィレム・テン・ライネ Willem ten Rhyne アンドリース・クラインヘル Andries Cleyer ゲオルグ・マイステル Georg Meister アルベルト・クローン Albert Croon エンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kämpfer ピーテル・ケステロート Pieter Kesteloot その他出島蘭館医師や科学者に接し、宝永八年三月二十九日に没した。

鎮山はフランスのルネッサンスの名医アンブローズ・バン Ambroise (Ambrosius) Paré の外科書をカロール・ハッス Carolus Battus が蘭訳した De Chirurgie

第二節 出島のオランダ商館医

ende Opera van alle de Werken van Mr. Ambrosius Paré (一六四九年刊) によって、紅夷外科宗伝を著わした。この書は、後に、檜林流と西流との教科書となった。なお鎮山はダニエル・ブッシュより修業証書を得たと伝えられている。

第二項 チュンベリーよりシーボルトまで

カルル・ペーター・チュンベリー(ツンベルグ、又はトインベルグ) Carl Peter Thunberg はスウェーデン人であるが、出島蘭館医として安永四年七月十九日(一七七五年八月十四日)、長崎に渡来した。

チュンベリーは寛保三年九月二十六日(一七四三年十一月十一日)に生れ、宝暦十一年(一七六一一年)、ウプサラ大学に入学して、植物学者リンネ Karl von Linné (Carolus Linnaeus) に従い、動植物学及び医学を修め、医学博士の称号を得た。

明和七年閏六月二十二日(一七七〇年八月十三日)、ウプサラを發つて、九月二十七日(陽曆十月五日)オラ

ンダのアムステルダムに着き、植物学を研究し、明和七年十月十五日(一七七〇年十二月一日)、フランスのパリー Paris に赴いた。それより更にオランダに帰り、明和八年七月二十日(一七七一年八月三十日)アムステルダムに着き、明和八年十一月五日(一七七一年十二月十日)、オランダ東インド会社に奉職して、船医となった。そして安永四年四月十七日(一七七五年五月十八日)、バタビアに着き、五月二十三日(陽曆六月二十日)、上外科医としてオランダ船スタフェニッセ Stavensisse 号に乗り、翌日、バタビアを出帆し、七月十九日(陽曆八月十四日)、長崎に入港したのである。

出島蘭館医として長崎に滞在したチュンベリーはバタビアより同行したカピタン、アレンド・ウィレム・フェイト Arend Willem Feyth 等と共に江戸に参礼したが、オランダ通詞たちに医学、薬学、植物学を教え、江戸でも医師、天文学者、物産学者の訪問を受け、それぞれの学問を教えた。

幕医桂川甫周及び若狭藩医中川淳庵は連日江戸の長崎

屋に滞在中のチュンベリーを尋ね、深夜に至るまで物理学、経済学、植物学、医学などを質問した。チュンベリーの持っていたベリー及びアムステルダム製の医療器具は彼等を予期以上に満足させた。チュンベリーは乞われるままに、江戸の医師たちに修業証書を書き与えた。江戸滞在が一ヶ月余りで長崎に戻り、安永五年十月二十三日（一七七六年十二月三日）、スタフェニッセ号に乗じて長崎を去つた。

日本滞在中、多くの植物標本を得、それをオランダに持ち帰った。その後、イギリスに渡り、安永八年春（一七七九年三月）、ウブサラに帰り、ウブサラ大学の教授リンネの後任として九月二十九日（陽曆十一月七日）員外教授に任ぜられ、天明四年七月二十三日（一七八四年九月七日）、同大学の医学及び植物学教授となつた。そして翌年ウブサラ大学長に任ぜられ、スウェーデン国王よりワサ級ナイトの勲章を授けられた。文政十一年六月二十八日（一八二八年八月八日）、ウブサラの近郊ツナベリー Tunaberg で没した。

チュンベリーの著述は多岐が、日本に関するもののみ、主なものは次の六種である。

Verhandeling over de Jhpnasche natie, hare Leden, Gebruiken en Munten. Uit het Sweedsch. Amsterdam, 1780.

Abhandlung von den Munzsorten. 1784.

Flora Japonica sistens plantas insularum Iaponicarum secundum systema sexuale emendatum redactas ad XX classes, ordines, genera et species eorum differentiis specificis, synonymis parvis, descriptionibus concinnis et XXX IX iconibus adiectis. 1784.

Icones Plantarum Japonicarum. 1794.

Resa nit Europa, Africa, Asia, förtattad åren 1770-1779. (Upsala 1791-1793)

Fauna Japonica, 1822-1823.

その他にも論文はスウェーデン王立学会雑誌に収録されている。例えば

第二節 出島のオランダ商館医

Histoire descriptio Caenopteridis (1794)

は日本産のシダ類をも取扱ったものである。

チェンベリーの門人として知られている長崎のオランダ通詞吉雄耕牛は後年隆盛した吉雄流外科の開祖ともなったが、その他、岡田養仙、栗崎道巴（後に道有と改めた）、天野良順、久志本常周等幕医も教えを受けた。

特に熱心な質問者だった桂川甫周及び中川淳庵は後年、解体新書の翻譯に当って、前野良沢や杉田玄伯に協力した。滞在期間は短かったが、チェンベリーの業績はわが国の蘭学の勃興に拍車をかけるものとなった。

文化二年（一八〇五年）、フェイルケ Jan Frederik Feilke がオランダ商館医として着任した。丹後由良の新宮涼庭は長崎に出て吉雄如淵に学び、フェイルケに従って大いに得るところあり、文政元年京に出て医学に順序階級を立てて子弟を教導した。

シーボルト Philipp Franz Balthasar von Siebold はわが国に渡米したオランダ商館医中、わが国の文化に大きな影響を与えた一人である。

シーボルトは一七九六年二月十七日（寛政八年一月九日）、バワリア王国のウエルトツブルグに生れ、三才の時父を失い、一八二〇年十月十一日、内科、外科及び産科学の学位を得、一時ハイディングスフェルトに開業していたが、一八二二年七月二十一日、オランダ領東インドの陸軍外科少佐に任命され、同時に、植民地において自然科学の研究に従事することとなった。同年九月二十三日、フレガット艦デ・ヨンゲ・アドリアナ号 *de Jonge Adriana* に乗り、バタビアへ向けて出帆した。翌年四月、バタビアに到着し、十八日、シーボルトは砲兵第五聯隊附となった。その後間もなく、陸軍大佐デ・ステールル Johan Willem de Sturler が出島のオランダ商館長に任ぜられた時、シーボルトもその商館医に任命された。文政六年五月二十日（一八二三年六月二十八日）、シーボルトはデ・ドリー・ヘッステルス号 *de Drie Gezusters* にステールル等と搭乗し、長崎に向かった。同年七月七日（陽曆八月十二日）、出島に上陸したシーボルトは間もなく、愉快にその研究を続けていた

が、同時に又、出島における医学伝習を毎週行い、牛痘接法を行った。然し牛痘接法は成功しなかった。シーボルトは日本の動植物の研究者として、将又、日本の政治、社会、法制、産業、農業、宗教、医学、本草学、言語、風俗、文学、歴史、地理その他の研究者として、又、考古学的、人類学的観察をも怠ることがなかった。わが国の紹介をヨーロッパ諸国にしたのも、シーボルトの場合、最も多方面に亘っていて、医学のみならず、諸学の研究に志していたシーボルトはわが国の蘭学者に多大の影響を与え、且つ西洋の学術に対する眼を開かした。

長崎の吉雄幸載、檜林榮建、同宗建等も、長崎に遊学していた湊長安、美馬順三、岡研介等もシーボルトに医学を学んだ。又、長崎奉行高橋越前守重賢は、非常な好意を寄せ、諸学究の出島入門を許し、シーボルトに教授せしめ、シーボルトの出島出門を自由ならしめた。シーボルトは渡来後一年目には鳴滝に別荘を持った。これは通詞中山作三郎の別荘であったが、その門人中の遠隔地から来遊していた学生たちをそこに集めて教え、美馬順

三、岡研介等はそこで助教を勤めた。

シーボルトは一ヶ月に何回も鳴滝に出て患者を診療し、臨床講義をなし、博物学その他についても指導した。植物学の研究で、出島及び鳴滝に植物園を開き、先学ケンペル及びチュンペリーの顕影碑を建立したのである。

文政七年十一月七日（一八二四年十二月二十六日）、商館長ステュルレルはシーボルトの医学、特に眼科学、外科手術学、婦人科学、植物学、地理学の知識を称讃し、これ等の他内科学についても伝習を受けることを奨励するよう長崎奉行高橋越前守に宛てて書簡を認めている。

さて、シーボルトに学んだ人としては、上記の他に、平井海蔵、岡泰安、戸塚静海、二宮敬作、高良斎、松木雲徳、高野長英、日高涼台、森田千庵、本間玄調、伊藤圭介、児玉順蔵、山口行斎、工藤謙同、石井宗謙、伊東玄朴、日野鼎哉、伊東昇廸、水野玄鳳、青木周弼、賀来佐一郎、百武万里、有吉周平、武谷元立、小関三英、竹内玄同、杉山宗立等で、従来のオランダ商館医に比較して最も多くの門人たちを持ったのである。シーボルトに

ついでには呉秀三博士著『シーボルト』、古賀十二郎著『西洋医術伝来史』その他の詳細な伝記があり、本稿ではシーボルトについて委しく述べる紙幅もないが、文政十一年秋の台風により、シーボルト事件が起り、取調の結果、シーボルトは文政十二年九月二十五日（一八二九年十月二十二日）、長崎奉行に召喚され、帰国を命ぜられ、同時に再渡来を禁ずる旨を申渡された。そこで同年十二月五日（陽曆十二月三十日）、長崎を離れることとなり、二日後、そのオランダ船は長崎港を離れたのである。

その後、安政五年七月十日（一八五八年八月十八日）、日蘭修好通商条約の締結によって、シーボルトの再渡来の禁が解かれ、翌年七月八日（一八五九年八月六日）長崎に渡来したが、その時は既に医師としてでなく、経済的又は外交的な活躍を目的としたものであった。然し、三瀬周三などの医学の門人もいて、岡部駿河守は七月十日、町使を以て「阿蘭陀国シーボルト渡来之儀ニ付申上置候書付」を、幕府に報じた。江戸においては大槻俊斎、同玄俊、井上伸庵、須田泰嶺、三宅良斎、戸塚静甫、高

須松亭、池田多仲、野中玄英、戸塚静海、伊東玄朴、伊東貫斎、竹内玄同、松本良甫、吉田収庵、杉淳道、林洞海、市川斉宮、加藤弘蔵等が質問応答した。シーボルトは外交顧問として幕府より取扱われたが、帰国後、慶応二年九月十日（一八六六年十月十八日）、バワリア王国の首府ミュンヘンに歿した。

第三項 モーニッケとファン・デン・ブルック

嘉永元年六月中旬、オランダ商館医として、オットー・モーニッケ Otto Mohnike が着任した。

モーニッケは、フランス人ラエンネック René Theophile Hyacinthe Laënnec (1781-1826) の発見した聴診器を齎したので、オランダ通詞品川藤兵衛（梅村）はそれをわが国で始めて模造した。吉雄家に伝えられた聴診器は現在、本学に伝えられている。

モーニッケは、出島のオランダ商館において医学及び気象学その他を教授した。気象観測所を同館内に設立し

実地の観測をなした。これはわが国における観測所設立の始めであつて、又実に長崎測候所の濫觴とも云えよう。それから、モーニッケは渡来の前年（弘化四年）フランスで製作された産科器械も持ち渡つていたが、モーニッケに従学した榎林宗建はそれを懇望し、後年（嘉永三年五月）藩主鍋島直正に献上した。宗建は又牛痘接種法を学び、長崎及び鍋島藩に普及したが、安政元年と二年の天然痘流行を機としてモーニッケは宗建のみならず、諸藩の医師に牛痘法を教授したので、わが国に牛痘法による予防接種が広く行われるようになった。

モーニッケは植物採集も試み、日本人の医学、迷信、昔噺、伝説その他の研究もして、発表するところがあつた。

著書 Die Japaner. Eine ethnographische Monographie. Münter (1872) がある他、論文として Aanteekeningen over de Geneeskunde der Japaneezen. (Tydschrift der Ver. tot Bevordering der Geneeskundige Wetenschappen in Nederlandsche Indië,

Vol. 1. Batavia, 1853)及び Volksberglauben, Legendes und Ueberlieferungen der Japaner (Globus, Bd. XXI, 1872) が知られてゐる。

ここで宗建の種痘を述べる前に、吉雄圭齋の種痘について述べて置こう。圭齋は明治維新に當り、長崎病院執事となつた人であるが、明治二十七年三月十五日、病歿した。圭齋の父吉雄幸載は、文化年中、オランダ商館医の伝授によつて、始めて品川藤十郎の母に接種した種痘が善感したので、他の人にも施行しようとしたが応ずる者なく、痘漿が全く竭き、遂に種痘法は一時中絶した。

その父幸載の素志を継いだ圭齋は嘉永元年六月十四日（一八四八年七月十四日）、モーニッケの齎した牛痘苗（ワインナ製）を基に種痘伝習と試みたが、モーニッケの乗船に赴くことは法制の禁ずるところであつたため、奔走百端の後、漸く翌々十六日に同船に赴くことを得親しく面接し、種痘法の伝習を請うた。モーニッケはこの渡来に當つて、自らオランダ通詞加福喜十郎の息、喜一に接種し、右腕に一顆を發した。同月二十四日、親戚内田

九一及びその妹菊子に接種し、善感したと云う。従来、榎林宗建の種痘法の功績のみが喧伝されているが、これは政治的に一藩に法令を發せしめた点で注目されるべきで、既に幸載父子が先鞭をつけていたわけであるが、この話は、翌年六月の牛痘痲輸入の時の話と混同しているようである。それはさて置き、その後も嘉永六年四月、圭齋は柴田方庵と共に種痘の無料奉仕を御年番所に願出たりして種痘の普及に努めた。

さて、榎林宗建は通称を龍馬、諱を高房、名を潜、字を孔昭、号を和山と云った。享和二年二月七日（一八〇二年三月二十一日）、榎林宗哲高連の次男として生れ、嘉永五年十月六日（一八五二年十一月十七日）、没した。文政六年、シーボルトに就いて兄榮建と共に学び、シーボルトが町年寄見習高島四郎太夫の斡旋により長崎奉行本多佐渡守の許可を得、五日に一度オランダ通詞、船番、町使、探番等五、六人の附添と共に榎林家に出張して一般診療に従事した際も宗建は家にあつてその臨床講義を聞き、医学を研究した。文政十年三月一日（一八二

七年三月二十七日）、父宗哲の後任として鍋島齊直の侍医となり、文政十二年五月十二日（一八二九年六月十三日）、御番方療治掛となった。鍋島齊直が隠退後、齊直は種痘の必要を痛感し、弘化四年正月、宗建に牛痘苗取寄方を取計らわせた。宗建は商館長レファイスン Joseph Henrij Leveysohn を通じて牛痘苗を取寄せることにし、翌嘉永元年六月、オランダよりモーニッケが牛痘漿を持ち渡ることになった。然しこのウインナ製牛痘漿は船中腐敗して結痲を見ず、再度注文した。嘉永二年六月、スタット・ドルドレヒト号 Stad Dordrecht によつて齎らされた牛痘痲は腐敗を免がれていたもので、これを宗建は自分の三男建三郎、オランダ通詞加福喜十郎の子喜市、同役志筑清太郎の子に接種して貰い、漸く結痲した。その後、鍋島齊正（後の直正）は嗣子直大に接種させ、藩内に普及せしめたが、これによつて、次第にわが国に種痘法が普及した。宗建の著書は嘉永二年刊、牛痘小考の他、羅甸葉名解、瘍医方函、外科瑣言、本草葉名解、榎林膏葉書、得生軒方函、磨尼缺対談録等がある。モー

ニッケと宗建による種痘法はわが国の衛生行政史を飾るものではあるが、これを援助した鍋島直正の英断も敬意を表すべきものがある。

モーニッケの後任者ファン・デン・ブルック J. K.

van den Broek は安政二年に渡来したが、物理、化学の権威者で、オランダの科学雑誌 *Naturkunde* の編輯者であった。モーニッケの後任者として、その志を継ぎ、医学を伝授する傍ら、自分の専門の物理、化学、測量、数学、石炭坑、鉄製造に関する知識を普及し、前任者の事業を受けて、大いに力める所があった。

ファン・デン・ブルックの自然科学に対する知識が深いことはオランダ通詞仲間に評判となり、遂に長崎奉行所では、安政二年十月二十八日（一八五五年十二月七日）、大通詞品川藤兵衛、小通詞西慶太郎、本木昌造、楡林栄左衛門、小通詞並塩谷種三郎、町医吉雄圭齋等六名に分離（化学）、窮理（物理）、測量、算術、石炭坑、鉄製造方、その他、国益となるべき事を手分して学習すべき旨を命じ、オランダ商館にもその旨、伝達した。そこ

で商館長ドンケル・クルチウス Jan Hendrik Donker Curtius はその旨、ファン・デン・ブルックに伝えたところ、ファン・デン・ブルックは十一月二日（陽曆十二月十日）に意見書をドンケル・クルチウスに差出した。

於出島 千八百五十五年十二月二日（卯十一月二日）

大通詞 品川藤兵衛

小通詞 西慶太郎 本木昌造 楡林栄左衛門

小通詞並 塩谷種三郎

町医師 吉雄圭齋

右之者共 分離 窮理 測量 算術 石炭坑 鉄製造方

其外御国益ニ可相成儀 かびたん并外科蘭人相心得居候

趣ニ付 銘々心掛有之筋を手分いたし 相学候様申付候間

外科蘭人江可申聞候事

右之通御達ニ相成承知仕候

右之趣ニ而相察候は 日本御奉行所ニおいても 前修之学

術規則相立相学候様有之度御主意ニ相見申候 然る処 右

御達ニ付 左之通 拙者心付候段 不申出候而は不相成と

存候

第一御奉行所において右之儀被 仰付候通詞衆之儀者 通弁

役にて蘭語学者に有之候間 外に年若之日本人拾人計も

拙者手許江被遣候方 可然儀ニ存候へ 右學術之術々 其

年若之人に教示致し 右通詞衆 分離或は窮理術被相好候

人は 夫々之通弁被致 事柄をも被相学 物之名目をも相

第二節 出島のオランダ商館医

覚可被申 左候得者 有益之事ニ可有之候 若又右通詞衆之内 算術 測量之業被相好候人者 教示之折節 其作業も被致候儀に可有之候

教示いたし方は 老人ニ而も 拾人ニ而も 同様にて試験致し方も 老人ニも 拾人ニ而も 同様ニ有之 猶雜費も 勞も 同様ニ有之 多人數ニ候得者 稽古之励ニも相成可申候

第二分離 窮理之教示ニは 元来要用之機器、薬味等必用ニ有之 右カビネット(諸機器 雛形等備置候場所)におゐて 莫太之雜費相掛可申儀ニ候 且又分離用薬味之儀 時々相用候ニ付夥敷費申候

第三右教示場所ニは 置附之竈有之 右之外ニ甕并持抱出来候一二の竈并錫管 冷桶付之蒸溜器設可有之儀ニ候 右器物類 於日本難得可有之存候間 態と申述候 右器類相用候得者 教示方利弁之儀者 追而御心付可有之候 乍去拙者不差置 当年者先拙者所持之品物或は持渡居候彼邦奉行所貯之品物相用 初学之教示致し 追々教導可致候

役 医師

於日本物産吟味方

い・か・ふあん・でん・ぶるつく

この意見書を添えて安政二年十一月十一日(一八五五年十二月十九日)長崎奉行川村对馬守へ宛てて、ドンケル・クルチウスの差出した書面には、ファン・デン・ブ

ルックの意見について奉行も考えて貰いたいこと、通詞等は各々その好む学の通弁をして伝習を助け乍ら自分も学び、若い日本人へ学習するように命じて貰いたいこと、ファン・デン・ブルックの申立に基いて伝習を始めるべきこと、長崎で、物理、化学の伝習を続ける計画を立てて貰いたいこと、物理、化学のため入用の器具等、外国より取寄せることが当面の急務であること、幕府で物理化学研究所設立を決定されたら、及ばず乍ら、それに入用なものを海外から取寄せるよう万端、可能な限り尽力すべきこと等を認めてあったが、その後、稲部禎次郎が伝習に加えられた。「自安政三年九月 至同 四年九月 文書科事務簿、手頭留、荒尾石見守ニ在勤、目安方」

手 附 江

阿蘭陀小通詞

西 慶 太 郎

同

本 木 昌 造

同

檜 林 栄 左 衛 門

同並

稲部 禎次郎

其方共去卯年中分離究理側量其外かひたん并外科相心得居候趣銘々手分致し相学ひ候様申渡候処此度御役所附其外別紙名前之ものとも江石炭其外坑業之儀坑師阿蘭陀人^五伝習御用申付候間其外兼帶諸事誠実ニ致通弁一同習熟致し候様厚く心懸ケ可相勤候

右之通申渡候間得其意坑業伝習掛もの^五も可申渡候

辰 十月

このような諸学の伝習は通詞たちの他、長崎奉行所からも伝習派遣を行っていた。そして奉行所ではその伝習の趣旨について、その委細を永持亨次郎の前で講ぜしめることとした。即ち安政四年三月十三日（一八五七年四月七日）、手附を経て奉行所から伝習を命ぜられた上原百馬等四名に対し、その申渡を發している。「自安政三年文書科事務簿、申渡留、荒尾石見守ニ在勤、月番、第十」

手附江

町役所附

上原 百馬

唐人番

倉田 錦三

船番

上原 源六郎

町司

牧 斐之助

右之もの共鉄^五金を曉付方并 金銀流し方外科蘭人^五伝習御用申付候間出精いたし研究行届候様厚心掛可相勤候尤右伝授之趣永持亨次郎江委細演舌可致候且又右伝習中坑業伝習之儀者休業之積可心得候

巳 三月

その後更に七月二十四日（陽曆九月十二日）に至って奉行所では山本物次郎等四名に対し、高炉反射炉の製造法その他鍊鉄鑄鉄などもファン・デン・ブルクに就いて学ばしめることとした。即ち同日、奉行所は手附を通じて次の文書を發したのである。

手附江

御役所附触頭

山本 物次郎

御役所附

上原 百馬

遠見番

小島 平太郎

第二節 出島のオランダ商館医

唐人番

吉田 鶴次郎

高炉反射炉製造方其他鍊鉄鑄鉄ホ之業外科蘭人ト伝習御用申付候研究行届候様可致候尤百馬儀者坑業伝習之方是迄之通可相心得候

巳七月

ここに述べてある石炭坑業については安政三年十月十二日（一八五六年十一月九日）より、上原百馬、倉田錦三、上原源六郎、牧斐之助に対して命ぜられていたことで、ファン・デン・ブルックの伝習に關して通詞たちに發したと同様、次の別文書が發せられていたのである。

御役所附

手附江

上原

百馬

唐人番

倉田 錦三

船番

上原 源六郎

町司

牧 斐之助

石炭山其外坑業之儀此度渡来之坑師阿蘭陀人ト伝習御用申付

候入念承札研究行届候様厚く心掛可相動候

辰十月

これより先、ファン・デン・ブルックは安政二年九月三十日（陽曆十一月九日）、幕府の第一次海軍伝習艦スパン Soenbing 号艦長グ・ファウイス G. Fabius は伝習教官長ベルス・ライケン G. C. C. Pels Rijcken を通じて伝習教官及び附屬して渡来しているオランダ人たちの診療を依頼された。且つ又、長崎の役医木村逸齋、薩摩藩医相良蜻州、福岡藩医河野禎造等は医学を学んだのである。

機械学、物理、化学等の門弟も多かったが、特に島津藩製煉所、黒田藩武器製作所等はファン・デン・ブルックの指導によるもので、わが国の近代科学工業の發達に大きな足跡を残し、現今の三菱長崎造船所の起源も、本木昌造の活躍と思ひ合わせると、遠くここに胚胎すると云えよう。按ずれば、寛永以来、來朝した出島のオランダ商館医は医学伝授の傍ら、諸般の學術を伝えて、本邦文化の資源をなしたのである。

ファン・デン・ブルックの *Neederland en Japan* に
よれば、前記門人の他に、福岡藩の古川俊平、藤堂藩の
堀江歙次郎、佐賀藩の秀島藤三郎等が挙げられている。

オランダ政府も、日本における産業の発達に及ぼした
ファン・デン・ブルックの功績を認め、オランダ植民大
臣及び外務大臣は、安政四年（一七五七年）、国王にそ
の旨を報告している。

安政四年八月十二日（一八五七年九月二十九日）、奉
行所が手附に与えた手頭に「出嶋滞在之外科蘭人当秋商
買船ニ而帰国いたし候ニ付諸向之伝習相断候旨申立候間
此段申達候 右之趣得其意支配之もの江も可申渡候 巳
八月」と云ってある。これはファン・デン・ブルックの
帰国をさすもので、ボンペ到着後のことであった。

出島のオランダ商館医たちについては、村上直二郎
訳『出島商館日記』にその動静が記してあり、それらの
業績はツェンペリー、シーボルトを除いて、古賀十二郎
著『西洋医学伝来史』に詳しい。

（ボンペ交替については後条参照。）